

〔魂の配慮〕

我、復活のイエスを信ず⁽¹⁾

山崎和明

聖句

（使徒言行録二・三二）

「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です」。

一、殺害計画

ナザレのイエスを殺害する計画は、入念に練られ周到に用意されていました（マタイ二三・三三）。その計画の首謀者は、ユダヤの指導部、つまり体制側の大祭司（カイアフアと祭司長の剪アンナス^{しゆつと}）でした。そして指導的立場にある祭司たち（主としてサドカイ派の人々）と民の長老たちが中心になってその計画は実施されました。

過越の祭りの木曜日の夜「ユダヤ式には、金曜日の夜」、イエスは、弟子たちと共に最後の晚餐（夕食）をエルサレ

ムですませました。イエスの十二人の直弟子の一人イスカリオテのユダは、晩餐の途中から席を立ち、イエスを裏切り、イエスを逮捕するための水先案内人として計画に加わっていました。他の十一人の弟子たちと共にイエスは、キドロン（ゲドロン）の谷の向こう（ヨハネ一八・八）、オリブ山にあるゲツセマネの園にゆき、そこで一人祈りました。イエスが祈っている間、自分の側にいてほしかった弟子、とりわけペテロおよびゼバイの子ヤコブとヨハネは、「誘惑に陥らないよう、目を覚まして祈っていなさい」とイエスに言われながらも、疲労からか三度にわたって眠りこけていました。弟子たちが眠り込んでいた間、イエスはただ一人、「死ぬばかりに悲しく」「恐れもだえ」つつ、血痔（血の汗が出るような祈り）を捧げ終えました。おそらく夜の十一時も過ぎ、深夜に近くになっていました。

その時、指導的立場にある祭司たち、神殿守衛隊長が遣わした武装集団（兵士、下役）^②が、イエスを捕らえるために、武器（刀や棒）をもってゲツセマネにやってきました。ユダヤの律法に従えば、神殿警備隊を管轄外のところ遣わして逮捕することはできません。違法でした（違法行為の1）。

イエスが逮捕されたとき、勇敢なペテロは剣を抜いて応戦し、大祭司の手下に打ち掛かり、片方の耳を切り落としたと言われています（マタイ二六・五一、マルコ一四・四七、ルカ二二・五〇、ヨハネ一八・一〇）。そこでイエスは、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」とたしなめました（マタイ二六・五二）。ヨハネ伝によれば、イエスは、「私を捜しているなら、この人々は去らせなさい」と、弟子たちを守ろうと逃しています。そして弟子たち（全員男子）がイエスを見捨てて逃げ出したと記録されています（マルコ一四・五〇、マタイ二六・五六）。

逮捕されたイエスは、大祭司カイアファの舅アンナスのところに連行され、引き続き大祭司カイアファの家に連れられます（ヨハネ一八・一三）。最後にユダヤの最高議会で、司法の「最高法院」^③でもあるサンヘドリンで、「深夜の裁判」に掛けられ、有罪と判断され、しかも極刑、死刑判決を受けました。^④

イエスの裁判と裁判手続きには、様々な違法行為がありました。死刑を科する裁判を夜半に、それも深夜に行うことは違法です（違法行為の2）。日没後に行うことが許されている裁判は、罰金刑のみでした。

イエスが逮捕された公式の理由は、（1）イエスが神殿を破壊すると脅したということでした。^⑤しかし、その背後に

は別の政治的理由が隠されていました。ヨハネは、次のように記しています。

「祭司長たちとファリサイ（『パリサイ…山崎注』派の人々は最高法院を召集して言った。この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」。彼らの中の一人で、その年の大祭司であつたカイアファが言った。あなたたは何も分かつていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか」（ヨハネ一・四七～五〇）⁶。

最高法院、サンヘドリンで、イエスが神殿を破壊すると脅迫したとの証言を巡って審議されましたが、証言が一致しなかつたため、イエスを有罪にはできませんでした。それにも拘わらず、イエスが有罪になった理由は、（2）イエスは、自分が神の子（メシア）であると主張し、神を冒瀆したからでした（不敬罪）。これは、イエスを告発する証言が一致せず、有罪にできなかったために取られた罠でした。この罠にはめられ、イエスは有罪となったのです。その模様を、マタイとマルコは次のように記しています。

「大祭司は立ち上がり、イエスに言った。へ何も答えないのか、この者たちがお前に不利の証言をしているが、どうなのか。イエスはだまり続けておられた。大祭司は言った。へ生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか・・・」（マタイ二六・六三）。「さうです」（マルコ一四・六二）。

こうして、サンヘドリンは、別件でイエスに死刑判決を下しました。つまり、審理の中でイエスから死罪に相当する証言を取り、それを聞いているサンヘドリンの議員たちが、その場で、自らその証人になって、死刑相当としてイエスを有罪にしたわけです。

サンヘドリンで証人たちの証言が一致しなければ、囚人を釈放しなければなりませんでした。そして、証言が偽証であつたとすれば、証人になった者は、石打ちの刑による死刑が宣告されねばなりませんでした。それにもかかわらず、サンヘドリンの裁判長自身が容疑者イエスに反対尋問し、議員らが自ら証人となり、別件で死刑判決を下すことは、そもそも違法でした（違法行為の3）。

弟子のヨハネは、「大祭司の知り合いであつたので」（ヨハネ一八・一五）、ペテロを連れて、大祭司の家の中庭まで入つていき、イエスの処遇を最後まで見届けようと思いました。その時、ペテロは、「お前もあのイエスの一味だな」と問われ、自分の身を隠すために、イエスを知らないと三度も否認したのでした。すると、イエスの予言通り、夜明けと共に鶏が鳴いたのでした。ペテロは、イエスの予言を強く否定し、一緒に死ぬ覚悟があると申し出ていました（マルコ一四・三二）。ペテロは、思いも寄らない形で予言の実現に打ちのめされ、激しく泣いたと記されています（マタイ二六・七五、マルコ一四・七二、ルカ二二・六二）。

夜通しの裁判の後、夜が明けた金曜日の朝に、イエスはポンテオ・ピラト総督のもとに連行され、ローマの裁判を受けます。当時のユダヤはローマの支配下であり、ポンテオ・ピラト（ユダヤ州総督）の管理下にありました。ユダヤ人は、一般の刑罰権は行使できませんでしたが、死刑という極刑は、ローマの許可がなければ、執行できませんでした。したがって、ローマの方式による処刑、つまり十字架による死刑が執行されました。

ピラトは、不本意ながらイエスを死刑にする裁判に巻き込まれ、不承不承、死刑執行を許しました^⑦。そのときの理由は、大逆罪でした。（3）「ユダヤ人の王」（ヨハネ一九章）と見なされるイエスがユダヤの民をそそのかし、シーザー（カエサル＝ローマ皇帝）に反抗させようとしたという理由です。ユダヤ人たちは

「もし、この男を釈放するのなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は、皆、皇帝に背いています」（ヨハネ一九・一二、一九・一五も参照）

と叫びます。ユダヤの祭司長たちでさえ「わたしたちには、皇帝の他に王はありません」と主張しました。つまりイエスを釈放すれば、シーザーの敵を認めることになるぞと威したのです。ピラトは、イエスを死刑にしようとするユダヤ人の計略にまんまとはめられたのです。

二、十字架上の死

死刑が確定した犯罪人には「むち打ちの刑」が加えられました。ローマ人が用いた刑罰の道具としての鞭むちは、数本の革紐に金属片や骨などが付けられていました。鞭を打つ際、それらが肉に食い込む様になり、その苦痛のため、普通の人間なら意識を失うほどであったと言われています。イエスはむち打たれ、その後、さらに自分で十字架を背負わされ、ゴルゴタと呼ばれる処刑場に向かいました。しかし、前日からの寝ずの審問と裁判、さらにはむち打ちの刑が加わり、イエスは、自分で十字架を最後まで背負うこともできず、キレネ人のシモンがイエスの十字架を代わりに担がされました。人間は意図せずして、御子イエス・キリストの十字架を担うこともあるという、象徴的な出来事でした。

金曜日の午前九時に、運んできた十字架に磔はりつけにされました（マルコ一五・二五）。おそらく右と左の首に釘打たれ、両足の甲を重ねて釘が打たれました。イエスの処刑は、他の犯罪者の処刑と同時に執行されました。金曜日の午後三時には、イエスは十字架上で息絶えました。そしてイエスの死亡を確認するため、一人の兵士が槍でイエスの脇腹を突いています。

ヨハネを除けば（ペテロは途中離脱）、男の弟子十人は、死刑執行の場にいませんでした。イエスを愛し最後まで見守ったのは、ガリラヤからイエスに従ってきた婦人たちでした。イエスの母マリアとその姉妹、クロバの妻マリア、ゼベタイの妻サロメ（ヤコブとヨセの母）、マグダラのマリア、ヘロデ王の家令（＝執事）クーザ（クザ）の妻ヨハンナ（ヨハナ）、アルパヨのヤコブ（＝小ヤコブ）とヨセ（ヨセフ）の母マリアなど、すべて女性です（マタイ二七・五六、マルコ一五・四〇、ルカ八・三、二四・一〇、ヨハネ一九・二五）。

金曜日の夕方になれば、安息日が始まります。イエスを早急に十字架から下ろし、死体を処理せねば、過越の祭りの安息日を聖なる状態で迎えることができませんでした。それで、サンヘドリンの決議と行動に同意しなかったというアリマタヤのヨセフという議員と、夜にイエスを訪問したところのあるバリサイ派の教師ニコデモ（ヨハネ一九・三九）とが、ピラトの許可を得て、イエスの亡骸を十字架から引き下ろし、ニコデモが香料一〇〇リトラを添え、ヨセフが持参

した亜麻布で遺体を包んで、エルサレムのゴルゴタの丘近辺の岩に掘った、まだ使ったことのない墓にイエスを収めました。そして大きな石で入り口を封じました。金曜日の日は暮れ、安息日に入りました。マグダラのマリアとヨセの母マリアは、イエスの遺体を収めた墓をしつかりと見届けて帰りました(マルコ一五・四七)。

三、^{から}空の墓

土曜日の夜、日が暮れてユダヤでは日曜日が始まります。土曜の安息日が終わると、外は真っ暗です。男たちは、ユダヤ人たちから受けるであろう迫害を恐れて、自分たちの居る家の戸すべてに鍵を掛けて、おののきながら自分たちの将来のことを思い悩んでいました(ヨハネ二〇・一九)。翌日曜の朝、まだ暗い内に、勇敢にもマグダラのマリアとヤコブの母マリアら(「ヨハナ」「ルカ二四・九」、「サロメ」「マルコ一六・二」)が、イエスの体に香油を塗るために、墓に向いました。すると、墓を閉じていた大きな石は脇に転がり、イエスを巻いていた亜麻布は離れたところに丸めて置かれ(ヨハネ二〇・七)、墓の中は空でした。

この「空の墓」から、世界の歴史は変わりました。戸惑いを隠せなかったマグダラのマリアに、何と復活したイエスが現れたのです。そしてマリアは、急ぎその事実を仲間の弟子たちに伝えました。使徒たちでさえ、その証言を信じませんでした。「婦人たちは、これらのことを話したが戯言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」(ルカ二四・一一)とルカは記しています。同日の夕方には、ユダヤ人から隠れ潜んでいた弟子たちにも、復活したイエスが現れました(ヨハネ二〇・一九以下)。エマオへの途上の弟子にも、復活のイエスが現れました。しかし、弟子たちはそれでもまだ信じなかったと言います。疑り深いトマスにも、復活のイエスは現れました。家の戸には、みな鍵が掛けてあったのに、復活のイエスが真ん中に立ち、トマスに「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい、またあなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい、信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と語りました。そしてトマスは「私の主、私の神よ」と言いましたが、復活のイエスは、「私を見たから信じたのか、見ないで信じる人は幸いである」と

言われました（ヨハネ二〇・二九）。ユダヤ人を恐れ、首都エルサレムを去り、ガリラヤの故郷の田舎に戻った弟子たち七人（ペテロ、ディディモと呼ばれるトマス、ナタナエル、ゼベタイの子Ⅱヤコブとヨハネ、他の二人の弟子）にも復活のイエスが現れ、その後、五旬節（墓が空であった日以降五〇日）までに、次第に復活のイエスを証す人たちが増えていきました。

四、検証

科学的合理的精神の持ち主には、イエスの復活を受け容れることはできないでしょう。当初、弟子たちも信じられなかったのですから、不思議はありません。しかし聖書の記事や、当時の論争、キリスト教の歴史という史実を入念に検討して、科学的合理的精神に則って判断すればイエスの復活について、どのような結論を引き出さねばならないか検討しましょう。

もし、イエスの復活が真実ではなく、「捏造」された「嘘」であつたらどうでしょうか（「捏造説」）。イエスは死んでしまつて復活していないのに、誰かが嘘をついて、イエスは復活したと言ひふらしたとすればどうでしょうか。こうした嘘をつくためには、イエスの死体を隠し通すか、処分せねばなりません。なぜなら、死体が見つかれば、復活したという戯言を語るキリスト者にはイエスの死体を突き付けて、そのキリスト者を黙らせることができますから。しかし、イエスの死体はありませんでした。見つかりませんでした。当時、死体があつたとか、見つかったという論争があつた形跡すらありません。たとえイエスの死体をうまく処分し隠しおせたとしても、こうした嘘に立つて、世界伝道がなされうるとは、およそ考えられません。自分がついている嘘の故に自分も迫害を受け、殺害されるとすれば、利益は何一つありません。どんな利益があつて、嘘をついてまでキリスト教を主張する意味があるのでしょうか。従つて、イエスの弟子たちが、意図的に嘘をついているという捏造説は成り立ちません。

イエスの弟子が墓からイエスの死体を運び去つたという「盗難説」もありますが、捏造説と同様に、この場合も、イ

イエスの弟子たちが嘘と偽りに立って伝道や宣教することに意味が見出せません。祭司長やパリサイ派の人々は、三日目に甦るとイエスが言っていたのを思い出し、弟子たちが死体を盗み出さないよう、そして復活したと言わないよう、総督ピラトに、墓にローマの兵士を見張りに立てるように依頼しています。この願いはかなわず、ローマの兵士ではなかったのですが、ユダヤ人の番兵が見張りに立ち、墓石まで封印したとあります（マタイ二七・六二以下）。ところが、当時イエスの墓を見張っていた数人の番兵は、婦人たちが見た出来事を祭司長に報告しています。祭司長や長老たちは、その兵士たちに多額の金を与え、彼らの寝ている間に、弟子たちが死体を盗んでいったと言わせたことあり、当時も、ユダヤ人の間にその話が広まっていたと言います（マタイ二八・一一以下）。

弟子たち以外に、誰か（ローマ側であれ、ユダヤの支配層であれ、第三者）が、イエスの死体を盗み出したという仮定も成り立ちません（「盗難説のヴァリエーション」）。なぜなら、そもそも盗み出す必要はないのですから。むしろ、イエスの弟子たちに盗み出されないように、イエスが死んだという事実を守ることの方が重要です。しかし、死体を守りきれませんでした。たとえ彼らが盗み出したとしても、世迷い言を語るキリスト教徒たちに、盗み出したイエスの死体を突きつけば簡単に黙らせることができたはずですが、それもできませんでした。

その他に、イエスは十字架上で死んではおらず（「仮死説」）、臨死体験をしたイエスが、墓の冷気に触れて息を吹き返したという「蘇生説」もあります。それらも成り立ちません。死に損ないのイエスがゾンビのように蘇生したとしても、イエスの体はぼろぼろの状態です。鉄びしが付いたむちで、（私の記憶が正しければ）四九回も打たれ、血は飛び散り、肉が裂けた体で、しかも、十字架に付けられた際、手足には釘穴があき、脇腹まで槍で突かれていたのですから。そんなイエスが息を吹き返しても、死に対する復活の勝利とか希望といった福音はおよそ生まれてきません。まずは傷の手当てをせねばならない状態でしょう。しかもいづれ、その手負いからイエスは死に至ります。すると弟子たちは嘘をついて、イエスの復活を捏造し伝道宣教したのかという同じ論理が繰り返されることになります。

弟子たちが探していた墓を間違えたという「錯覚説」も成立しません。墓の場所を間違えたのなら、イエスの死体は別の所にあったはずですから、その死体を突きつけば、復活のイエスなどと御託を並べる弟子たちはいなくなり、誰

一人信じなくなるでしょう。そうすれば、亡骸のイエスが真の姿であつて、復活のイエスは錯覚に過ぎないということが明らかになるでしょう。

復活したイエスを見たという幻覚に陥っているのだという「幻覚説」もあります。しかし、イエスの亡骸を見せれば、これまた幻覚から目覚めるときが来るでしょう。しかし、イエスの亡骸がそもそも無いのです。

以上のように、合理的な精神に立つても、弟子たちの主張は嘘ではなく、イエスの亡骸はなく、墓は空であつたとの結論を認めざるを得ません。そして弟子たちが真実を語っていると信じるなら、イエスは復活した以外に考えられないのです。

五、我、復活のイエスを信ず

実際こうした議論を、当時、最も詳しく戦わせた人間がいました。それはサウロという後の使徒パウロでした。青年サウロは、キリスト教徒が嘘や、はったりを語り、神を冒瀆する集団であると確信していました。彼は、ユダヤ人の先頭に立つて、キリスト教徒から恐れられるほど迫害し、抹殺しようと意気込んでいました。彼は、ローマの市民権も持ち、ギリシャ・ヘレニズム文化や教養を備えた知識人で、生粋のユダヤ人でした。律法に関しては、パリサイ中のパリサイでした。イエスの弟子ステファノがユダヤ人と論争し、石打ちの刑で処刑された時の証人でもありました。このサウロが、キリスト教会を迫害するためにダマスコへ行く途上、復活のイエスと出会つたのです。使徒行伝の九章を読んでください。そして彼は、名前をパウロと変え、異邦人へのキリスト教伝道を果たし、最後はネロの迫害の下に殉教したほど、最後までイエス・キリストの忠実な僕となりました。そのサウロであつたパウロが、コリント前書の一五章に、次のように書いています。

「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しつか

り覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまわうでしょう。最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファ（ペテロのこと…山崎注）に現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしく、大部分は今なお生き残っています（疑うなら、直接聞きに行ったらよいと言わんばかりに描いています…山崎注）。次いで、ヤコブ（イエスの弟のヤコブ…山崎注）に現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと行って、神に反して証しをしたことになるからです。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります」（コリント前書一五・一～一七）。

ユダヤ人をあれほど恐れ、逃げ惑っていた弟子たちは、復活のイエスと出会ってから、約束された聖霊を受けるために、首都エルサレムに戻ってきていました。イエスが復活してまだ七週間（四九日）もたっていないませんでした。一二〇人ほどが一つになって熱心に祈っていました。そして五旬節の日に、大胆にもユダヤの中心エルサレムで、公然とペテロが復活のイエスをユダヤ人たちに宣教し始めたのです。今朝の聖句は、まさにその説教の一部です。そしてその日の内に三千人ほどの仲間が増えたとあります（行伝二・四一）。そうしてキリスト者は、土曜日の安息日ではなく、主が復活した日曜日を記念して聖なる主日を守るようになりました。

そして主の復活を信じたキリスト者は、何度も逮捕・拘留、刑罰・脅迫を受けても、その確信を捨てることも変えることもありませんでした。ユダヤ教から派生した一派であった、ナザレのイエスを神の御子と信じる団体が、キリスト

教（教徒）として誕生しました。二五〇年以上にわたる弾圧と迫害の歴史の中で、イエスの弟子と呼ばれる人たちのほとんどすべてが、イエスと同様に、処刑されて殉教していきました。しかし、それでもなおキリスト教徒が絶えてなくなることはありませんでした。三一三年コンスタンチヌスがミラノの勅令を出して、あのローマ帝国がキリスト教を公認するに至りました。そして宗教改革、宗教戦争の中、同じくこの復活信仰とキリスト教精神により人権思想や近代の民主主義が成立してきました。このキリスト教がヨーロッパの精神と社会、そして学問と文化を形成したと言っても過言ではありません。近代の科学や技術を生むにいたる実験科学も、修道院におけるキリスト教信仰を抜きにしてはあり得ず、キリスト教は音楽・芸術にまで深く浸透しています。そして現在ではキリスト教は世界の普遍的宗教として、世界人口七〇億人のうち、二十数億人、実に1／3を占めるに至っているのです。

死を克服して復活した御子イエス・キリストの福音を述べ伝えることがキリスト教の始めなのです。これが、四国学院の建つ土台、四国学院を建てた設立者の信仰でもあるのです。

祈祷

あなたが共にいてくださり、私のような者をも、復活のイエスの証人とさせて下さいましたことを感謝いたします。勇敢にも命を賭しても証言し、忍耐と希望をもつて闘い、迫害にもめげない先人たちの信仰を、今も甦らせてください。ここチャペルにおいても、本当のキリスト教信仰が明らかにされますように。復活のイエス・キリストの御名を通して父なる神様をお願いします。アーメン。

注

（1）本稿は、二〇一二年の四月二〇日に担当したチャペル講話に手を加えたものである。四〇年以上も前に、フランク・モリソン、清水汜

訳『イースターの朝のできごと』（みくに書店、一九六八年）を読み感動した。その感動は、ずっと確信として持ち続けている。そして今回もチャヤベルで話するために、読み直し参照した。

(2) ルカ伝では、「宮守かしら」、「宮の（神殿）守衛長」（ルカ二二・四、二二・五二）と表現され、ヨハネでは、エルサレム駐留のローマの守備隊長である「千人隊長（卒長）」（ヨハネ一八・一二）とあり、マルコでは、「律法学者、長老たち」（マルコ一四・四三）のみが記されている。

(3) 首都エルサレムでは七〇ないし七一人の議員よりなる大サンヘドリンのこと。

(4) ルカは、金曜の早朝、夜明けにサンヘドリンに連行したと記している（ルカ二二・六六）。

(5) マタイ二六・六一、マルコ一四・五八。実際は、ヨハネによれば、イエスが宮清めの際に「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と語った言葉に由来する（ヨハネ二・一九）。

(6) ヨハネは、続く箇所で、次のように記している。

「これは、カイアフアが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ」（ヨハネ一一・五一〜五三）。

カイアフアのイエス殺害の政治的意図が、図らずもイエスの宗教的贖罪の意味を預言していたのであった。

(7) ピラトの妻は、夢でうなされ、イエスのことで、ずいぶん苦しめられたようである（マタイ二七・一九）。妻は、ピラトにイエスの件に関わらないようにと、裁判の席にまで伝言を届けていたほどであった。ピラトはイエスと関わらないために、（イエスの出身地ガリラヤの領主であった）ヘロデ・アンティパスの許にイエスを移送したが、イエスを「ねたむ」ユダヤ人たちの奸計で、どうしても死刑にするため再びピラトのもとに逆送された。ピラトは、結局、釈放しきれずに、イエスの処刑を許可してしまい、使徒信条に「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ」と汚名を残してしまった。